

出来事の認識の違いに起因する英語と 日本語の言語表現の違い

— 翻訳における例 —

Differences in Japanese and English Expressions Due to Differences in How Events are Construed: Examples from Translation

菊地 敦子
Atsuko Kikuchi

In this paper I examine three sentences from Ruth Benedict's unpublished manuscript, 'The Story of My Life', in which the first person singular appears as the direct object, and a third person singular appears as the subject. When translated into Japanese, these sentences become unnatural unless the first person singular is moved to the subject position. I explain why this is so by using Langacker's Cognitive Grammar framework and argue that in Japanese, the speaker is normally construed as the most prominent participant in the situation and therefore coded as the subject of the sentence. This fits with previous studies in which linguists have argued that the speaker is assumed to be the center of epistemological perspective in Japanese. The paper demonstrates how "unnaturalness" in translation can be explained and also shows the restriction imposed on what can be said in Japanese due to the way Japanese speakers construe the world around them.

キーワード

translationese, cognitive grammar, construal, subject, prominence

1. はじめに

翻訳をする際、通常、最初の試訳は原文の影響が強く、訳文のみを読み進めるとそれが不自然である場合がほとんどである。そのため、後に目標言語に合わせてより自然な文に変えるというプロセスを経る。英語の文を日本語の文に訳す時、たとえ原文の英語がごく自然な文であっても、それを日本語の単語で置き換え、日本語の文法構造に合わせて並べ替えてもまだ日本

語としてなんとなく座りが悪い文がある。「座りが悪い」というのは、翻訳調に聞こえて日本語として違和感があるということである。同じような不自然さのパターンに何度か出くわすと、なぜそれが日本語では不自然なのかという疑問が浮かぶ。

本稿で扱う不自然な訳文とは、話者が主語以外の位置に現れ、主語に話者以外の人物が現れる文である。原文の英語ではこのような位置関係になっているのだが、それをそのまま日本語に訳すと違和感が残り、より日本語らしい文にするには話者を主語の位置にもってくる必要がある。これを単に日英の文法構造の違いだと片付けてしまうと、なぜ日本語では主語に話者を置くことが好まれるのかという説明にならない。そして、言語類型的に英語と日本語を比べて、英語では話者を差し置いて客観的に状況を述べることができるのに対して、日本語は話者を重視する言語であるということが見えてこない。

これまで日本語らしい表現、英語らしい表現に関する考察(木村 1993、国広 1974、池上 1981、2006)や、日英語の視点を比較した論文(Uehara 1998)、日英語の無生物主語構文の認知メカニズムを扱った論文など(対馬 2011)などがある。しかし、本稿では、これまであまり取り上げられてこなかった日英語の主語の選択の仕方の違いを、人間がある事態をどう捉えるか、その捉え方の一つとして Langacker が提唱する「際立ち」という概念を使って分析する。

2. データ

本稿で取り上げる下の3つの文は、著者が翻訳している *Anthropologist at Work* (Mead 1959) に収められたルース・ベネディクトの未完成の原稿、‘The Story of My Life’ に現れる文と、その試訳 (a)、そして最終訳 (b) である。英文3は英文2のすぐ後に続く箇所である。下線の部分が焦点を当てる箇所である。

1. When I was four, my grandmother took me, in the casual neighborhood custom of that farming country, to a tenant house on the hill where the baby had just died, and we saw the dead child as a matter of course. (Mead 1959: 99)

1a. 私が4歳の時、祖母が私を丘の上の貸家に住んでいる家族のところへ連れて行きました。その家族は赤ちゃんを亡くしたばかりでした。農家ではごく当たり前の習慣で、私たちは当然のように死んだ赤ちゃんを見ました。

1b. 4歳の時、祖母に連れられて丘の上の貸家に住んでいる家族のところへ行きました。その家族は赤ちゃんを亡くしたばかりでした。農家ではごく当たり前の習慣で、私たちは当然のように死んだ赤ちゃんを見ました。

2. Mother had gone away for a few days' visit when I was three or four, and had asked for my promise that I wouldn't run away while she was gone. (Mead 1959: 101)

2a. 私が3歳か4歳の頃、母が用事で何日か外出することになり、留守の間に絶対に家出をしないと私に約束させました。

2b. 私が3歳か4歳の頃、母が用事で何日か外出することになり、留守の間は絶対に家出をしないように約束させられました。

3. But I did. When she got back she questioned me about my promise, and I refused to answer. (Mead 1959: 101)

3a. でも私は家出をしました。母が帰宅して、私が約束を破ったことをとがめましたが、その理由を言うことを私は拒否しました。

3b. でも私は家出をしました。母が帰宅して、約束を破ったことをとがめられましたが、その理由を言うことを私は拒否しました。

上の3つの文で共通しているのは、文を書いた人物（この場合、ルース・ベネディクト）が自分（つまり「私」）が関わった出来事について述べている点である。そして、出来事には、その他に別の人物が登場している。1の文の場合には「祖母」が、2と3の文では「母」が登場している。

英語の文では、「私」以外の人物（1では「祖母」、2、3では「母」）が主語の位置を占めていて、目的語の位置に「私」がある。しかし、それをそのまま訳したaの試訳は日本語として違和感があったので、bに変えた。この「違和感」は著者と、著者と一緒に翻訳をしている日本語母語話者両方で感じたものである。

試訳のaの日本語文では、英語と同様に、1の文では主語を「祖母」とし、2と3の文では「母」とした。1の文では「祖母」が「私」を連れて行き、2の文では「母」が「私」に約束をさせ、3の文では「私」をとがめた。しかし、このままでは日本語の文を読んで違和感が残ったので、それぞれの文で主語を「私」に変えた。日本語では話し手・書き手と主語が一致する場合、第一人称を省略するので、文の表層には現れていないが、1b、2b、3bの主語が「私」であることは明らかである。

本稿では、1～3の元の英語文とbの日本語文を比較するのに Langacker (2008) の認知文法の理論の枠組みを使って、英語話者と日本語話者がある出来事を言語化する時にどのように

してその状況を捉え、何に注意を向けてその周りのものと関連づけて言い表すかを考察し、それが翻訳に与える影響を論じたい。

まず初めに Langacker をはじめとする 認知言語学者が言語の意味をどのように捉えているかを紹介したい。

3. 認知意味論と認知文法

伝統的な意味論で意味は言語記号が表すものとされていたのに対し、認知意味論 (cognitive semantics) の考え方では、意味は人間がどのようにして世界を認知する (解釈する) かを表しているものと捉える。つまり、言語表現には認知主体である人間が関与しているのである。Langacker もこのような考え方を持つ言語学者の一人である。

私たちの周りにはあるものは雑然としており、それをどう解釈して捉えるかによって様々な言語表現が可能となる。それぞれの言語表現はそれを使う人間の解釈を表しており、それを聞いた人間もその解釈を理解することになる。Langacker (2008: 43) の例を取れば、下の図1を見ていくつかの解釈が考えられる。

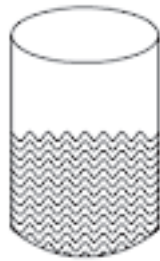


図1 概念化する内容 (Langacker 2008: 43)

上の内容を頭に描いたときには漠然としていても、それを言語化した途端に一定の解釈が与えられる。可能な4つの解釈を表したのが以下の文である (Langacker 2008: 43)。

- a. the glass with water in it
- b. the water in the glass
- c. the glass is half-full
- d. the glass is half-empty

a ~ d までの解釈の仕方を図式化したのが図2である。

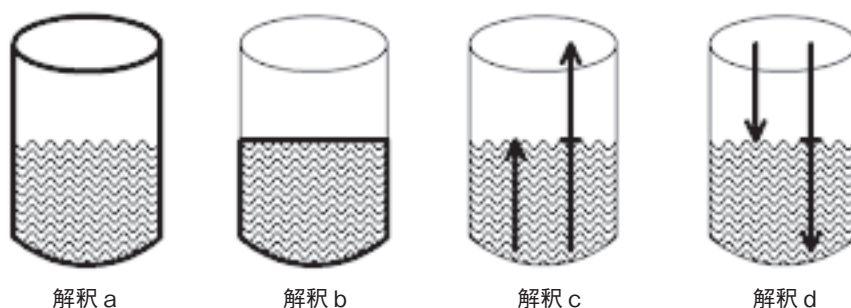


図2 解釈の違い (Langacker 2008: 43)

図の中の太線は a ~ d の言語表現で概念内容のどの部分が言及されているかを表している。

上の例が何を示しているかということ、言語表現の意味に含まれているのは、そこに現れる単語が呼び起こす概念だけではなく、その概念がどう解釈されているかということである。

Langacker (2008) によると、ある状況（それは目に見えるものとは限らない）を言語で表そうとする時、人間はいくつかの選択をする。どのくらい詳しくその状況を述べるか、その状況の中のどの要素を選んで述べるか、状況の何に焦点を合わせて述べるか、そして、どの視点からその状況を述べるかなどを選択して文を構成する。このようにある状況を表す時に話者が選ぶこれらの要素を Langacker (2008) は、それぞれ、specificity, focusing, prominence, perspective と呼んだ。これらの選択によって、その人間がどのようにしてその状況を解釈したのか言語表現に現れるのである。この論文で特に取り上げるのは、この中の prominence の選択である。

私たちはものを見る時に外界の全てのものが同等に目に入ってくるわけではない。漠然とした中から際立ったいくつかの要素に注意を向ける。その中でも特に際立ったものを選び、他の要素はその際立った要素の背景的要素として捉えられる。言語表現はこのようなものの捉え方を反映している。例えば、「XはYの上にある」と言った場合、Xに注意を向けて、Yを背景としてXの位置を示している。しかし、同じ状況を「YはXの下にある」とも言える。この二つの表現の違いはどこにあるかということ、XとYのどちらを際立たせて表現したかの違いである。言語表現をする際に、際立った要素を選択することを prominence という。Langacker (2008) が提唱する認知文法 (cognitive grammar) では、最も際立つ要素を trajector と呼び、言及される他の要素で二番目に際立つ要素を landmark と呼んでいる。「XはYの上にある」という文では X が trajector で Y が landmark で、「YはXの下にある」の文では Y が trajector で X が landmark ということになる。Langacker (2008: 71) は下の二つの文を図3で示している。

4. a. The lamp is above the table.
 b. The table is below the lamp.

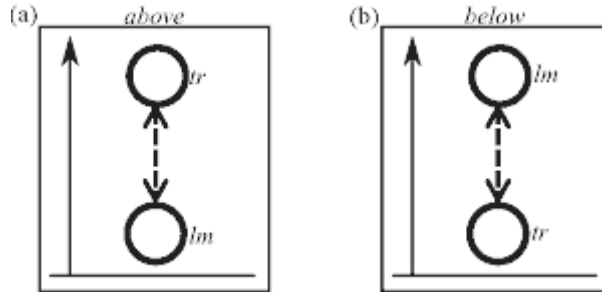


図3 Trajector と Landmark (Langacker 2008)

図3の中の丸は注意が向けられた二つの要素（ランプとテーブル）を示している。4aの文でも4bの文でも同じ二つの要素に注意が向けられている。そしてその二つの要素は4aの文でも、4bの文でも同じ関係にあるのだが、4aではランプの方がより際立った要素に選ばれて、テーブルは二番目に際立った要素となっている。つまり、ランプがtrajector (tr)で、テーブルがlandmark (lm)となっている。一方、4bではテーブルがより際立った要素に選ばれて、ランプは二番目に際立った要素となっている。テーブルがtrajector (tr)で、ランプがlandmark (lm)となっている。

上で挙げた例はある場面の中の一つの要素の位置をもう一つの要素との関係で示した例だが、本稿で取り上げたい翻訳の例を論じるには、ある事態の中で一人がもう一人に何らかの状態変化をもたらす状況を表す文について考えなければならない。Langacker (2008) の認知文法においてこのような文がどのように扱われているのかを次のセクションで述べる。

4. 文構造

認知文法で動詞は、あるプロセスを表すものと見なす。プロセスと呼んでいるのは、時間経過の中で変化する行為、あるいは状況のことである。そのプロセスには必ず一つ、あるいは複数の名詞によって表された参与する実体 (participant) が関わっている。動詞はその participant との関係、あるいは participants 同士の関係を表している。その関係は力動関係 (force dynamics) に基づいている。一つの実体の中で力が流れ、同じ実体はその力を受け取って状態が変化する場合もあれば、一つの実体からもう一つの実体に力が流れ、力を受け取った実体の状態が変化する場合もある。後者の場合、一つの実体からもう一つの実体に力が流れる様子を Langacker (2008) は action chain と呼んでいる。力の源となる実体は通常最も際立つ要素として捉えら

れる。つまり、上で述べた trajector と捉えられることが多い。そして力を受け取る実体は、力の源となる要素より際立ちが低いと捉えられ、landmark とみなされることが多い。

力の源となる実体と力を受け取る実体、そしてそれら2つの実体を見ている人を Langacker は次のように図式化している。

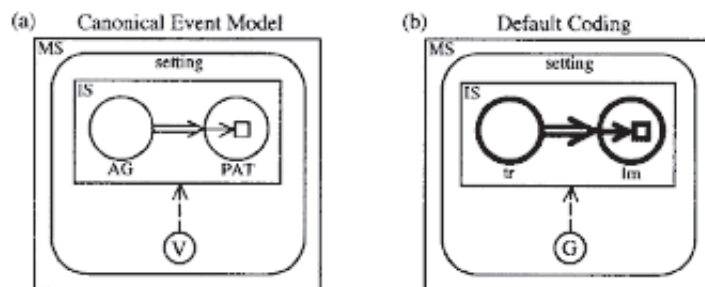


図4 事態のモデルとそれを言語化する時の標準的概念構造 (Langacker 2008: 357)

図4の(a)が表しているのは上に述べた事態である。事態に関わっている二つの実体が丸で表されている。矢印は力の流れを表している。Agent (AG) が力の源である実体で、patient (PAT) が力を受け取る実体である。この様子を外から眺めているのが Viewer (V) である。右の(b)が表しているのは、この事態を言語化する時の標準的な概念構造である。力の源である実体を trajector とし、力を受け取る実体を landmark として捉えて言語化することを示している。Ground (G) はこの事態を言語化する行為に参加する人を表している。

図(b)の概念構造を具体的な文で表す時、trajector は「主語」となり、landmark は「目的語」となる。つまり、認知文法論で「主語」とは、私たちがある状況を見た時にその中で最も際立ったものとして捉える要素であり、「目的語」は二番目に際立ったものとして捉える要素なのである。このようにして、図(b)の概念構造は次のような文に言語化される。

5. John hit Mary.

5の文では John をこの状況の中で最も際立っている実体として捉え、Mary を二番目に際立った実体として捉えている。そして、動詞の hit はこの二つの実体の関係を表しており、その関係は、力動関係に基づいている。John という力の源から力が Mary に流れ、Mary はその力を受け取る実体なのである。

しかし、5の文は(a)の状況を言語化する標準的な概念構造(b)に基づいていて、標準的ではない、他の概念構造も考えられる。例えば、(a)の状況の中で力を受け取る実体を最も際立った実体と捉えるとしよう。そうすると、(b)の概念構造の中で landmark となっている右

の丸が trajector となり、左の丸が landmark となる。そして、その概念構造を英語で言語化したのが次の文になる。

6. Mary was hit by John.

つまり、認知文法論で「主語」となるのは、その状況を外から眺めている Viewer (V) にとって最も際立っている実体を表すものなのである¹⁾。Viewer とは、この状況を言語化する時の概念構造で言語行為に参与する Ground (G) で、これはつまり、話者である。標準的な概念構造で trajector、landmark となるのは話者以外の人物で、話者はその状況を外から眺めて状況を言語化する。ここで注目したいことは、図4の (a) は Viewer が眺めている状況を図式化したもので、言語に縛られていないという点である。(b) はそれを言語にする時の元となる標準的な概念構造を表しており、この図が表しているものとは違う概念構造も考えられる。最も際立つものとして見る実体を変えることができることはすでに述べたが、この概念構造をどのようにして言語化するかは言語によって異なる方法を取ることがある。その違いが表れているのが、本稿で扱う例である。

5. データの分析

上のセクションでは、ある事態を見ている Viewer が事態の中から際立った要素を選び、その中で最も際立っていると捉えた実体を主語にして事態を言語化すると説明した。そして、標準的な事態においては、際立った要素は Viewer 以外の人物であると述べた。しかし、時には、事態の中の要素に Viewer、つまり、話者が含まれることがある。セクション2で挙げた翻訳の例はそのようなケースである。1の文では、my grandmother が最も際立った実体として選ばれて主語として現れており、me が二番目に際立った実体、そしてその他に a tenant house on the hill などの実体が現れている。

1. When I was four, my grandmother took me, in the casual neighborhood custom of that farming country, to a tenant house on the hill where the baby had just died, and we saw the dead child as a matter of course. (Mead 1959: 99)

動詞の took は grandmother と me の関係を表しており、その関係というのは、took という力が grandmother を源とし、me に流れたという関係である。Grandmother は力の源なので grandmother を主語にするのは英語では標準的であると考えられる。しかし、日本語の 1a は少し違和感がある。

- ? 1a. 私が4歳の時、祖母が私を丘の上の貸家に住んでいる家族のところへ連れて行きました。その家族は赤ちゃんを亡くしたばかりでした。農家ではごく当たり前の習慣で、私たちは当然のように死んだ赤ちゃんを見ました。

違和感がどこにあるかという点、「私」を差し置いて「祖母」が最も際立った実体選ばれている点である。実際、Langackerも人間にとって際立って見えるものは何かという点、共感しやすいものであり、最も共感しやすいものとして話者自身を挙げている。人間には共感しやすいものと共感しにくいものがあり、それは連続した階層を成しているとLangackerは考える。Langackerの共感度の階層は以下のようなものである。左端が最も共感しやすい要素で、右端が共感しにくい要素である。

speaker > hearer > human > animal > physical object > abstract entity

(Langacker 1991: 307)

しかし、英語では、この共感度をくつがえして、力の源である「私」以外の実体を最も際立つ実体と見なすことができ、それはごく自然な文構造である。それに対し、日本語では、事態の中に「私」という実体が存在すれば、それを最も際立った要素として扱うのが自然なのである。

2の文を見てみよう。2の英文ではMotherが最も際立った実体で、my promiseが二番目に際立った実体である。その二つの実体がどう関係づけられているかという点、motherがmy promiseを求めたという関係である。Motherがask forという力の源で、その力はmy promiseに流れている。「私」がどう関わっているかという点、my promiseに関わっている。この場合でも、日本語では「私」を最も際立つ実体にしないと不自然になる。

2. Mother had gone away for a few days' visit when I was three or four, and had asked for my promise that I wouldn't run away while she was gone. (Mead 1959: 101)

- ? 2a. 私が3歳か4歳の頃、母が用事で何日か外出することになり、留守の間に絶対に家出をしないと私に約束させました。

- 2b. 私が3歳か4歳の頃、母が用事で何日か外出することになり、留守の間は絶対に家出をしないように約束させられました。

2の文の場合、最初の節の主語がmotherなので、それに続く節もmotherが主語になるのがごく自然で、日本語でも同じように思える。しかし、ここでも2aの日本語文は不自然に感じる。

しかし、2aの場合、日本語母語話者によっては違和感がないという人もいるかもしれない。

次に3の文を見てみよう。3の英文では、she (mother) が最も際立った実体で、me が二番目に際立った実体である。その二つの実体がどう関係づけられているかという点、mother が me を question したという関係である。Mother が question という力の源で、その力は me に流れている。

3. But I did. When she got back she questioned me about my promise, and I refused to answer. (Mead 1959: 101)

3の文の場合も2の文と同様、最初の節の主語が mother なので、それに続く節も mother が主語になるのがごく自然で、日本語でも同じようになると思える。しかし、3aの日本語文は不自然に感じる。文の最後の節の主語が I だということも関係しているのかもしれない。いずれにしても、日本語としては、3aより、3bの文の方が座りがいい。

? 3a. でも私は家出をしました。母が帰宅して、私が約束を破ったことをとがめましたが、その理由を言うことを私は拒否しました。

3b. でも私は家出をしました。母が帰宅して、約束を破ったことをとがめられましたが、その理由を言うことを私は拒否しました。

上の3つの英文と日本語訳から言えることは、日本語では最も共感性が高い「話者」(「私」)を差し置いて、第三者を最も際立った実体として捉えるのは不自然であるため、英文とは異なる主語を選ぶということである。

6. 日本語と英語の言語類型的な違い

言語類型論的に英語と日本語を比べると、英語は「する」型の言語であることは池上(1981)やHinds(1986)などが指摘している。英語は「誰々が何々をした」という文型が強く確立した言語だと言える。同時に、日本語では状況を説明するのに話者、つまりI(私)の視点が重視されることをIwasaki(1993)、Uehara(1998)が指摘している。

Uehara(1998)はIwasaki(1993)の例を取り上げ、ある出来事を表現する時、その出来事に「私」が関わっている場合、日本語ではしばしば「私」が言語化されないことを指摘している。下の文はUehara(1998)がIwasaki(1993: 80)を引用して挙げた例である。

7. Then I saw a big lady standing there.

7a. 太ったおばさんがいたの。

7の文の主語を Uehara (1998) は discoverer subject と呼び、英語では a big lady を「発見した」I が言語化されているが、日本語では「私」が言語化されていないことを指摘している。

さらに Uehara (1998) は、英語から日本語に翻訳された文の中で、英語では第3者が主語として現れているのに、日本語の訳文ではいつの間にか主語が「私」に入れ替わり、「話者」の視点から状況を説明していることを述べている。

Uehara (1998) は O. Henry (Porter 1948) の *The Last Leaf* という小説の英文と日本語訳（大久保康雄訳 1953）を例に挙げて、次のように比較している（Uehara 1998: 285）。

8. When Sue awoke from an hour's sleep the next morning, she found Johnsy with dull wide-open eyes staring at the drawn green shade.

8a. 翌朝、スーが1時間ほど眠ってから目を覚ますと、ジョンシーは生氣のない目を大きく見開いて、おろされている緑色のシェードをじっと見つめていた。

8の英文で話者はこの出来事を外から眺め、スーが目を覚ました時にスーが発見したことを客観的に言語化している。一方、日本語の訳は少し違う。「ジョンシーは生氣のない目を大きく見開いて、おろされている緑色のシェードをじっと見つめていた」という部分は先にあげた7aの文と同じで、ジョンシーを発見した「私」が言語化されていない文である。つまり、日本語の文の後半で語り手は出来事を客観的に見ているのではなく、スーになりきって、スーの視点から見たことを言語化している。Uehara (1998) は英文の主語をそのまま残すとどのような訳になるか述べていないが、もし、英語の主語を残し、英文に近い形で翻訳すると以下のような文になる。下線の部分が英語の主語を訳した箇所である。

8b. 翌朝、スーが1時間ほど眠ってから目を覚ますと、彼女は（スーは）、生氣のない目を大きく見開いて、おろされている緑色のシェードをじっと見つめているジョンシーを見つけた。

日本語として8aの方が8bより自然なのは明らかである。

上の例が何を示しているかということ、英語と比べて日本語では状況を眺めている話者の視点が入り込みやすいということである。言語類型的に英語では話者を差し置いて客観的に状況を

述べることができるのに対して、日本語は話者を重視する言語であると言える。本稿で取り上げた例もこのパターンに沿っていると言えるのではないだろうか。英語の文では、たとえ話者が状況の中の一つの実体であっても、動詞によって示された力の源である実体を最も際立った実体とし、話者である「私」を二番目に際立った実体に置くことが可能である。それに対して日本語では、状況を言語化しようとしている話者がその状況の中にいる場合、話者である「私」を最も際立った実体として捉えるのが自然である。

7. 翻訳について

最後に本稿で述べたことが翻訳とどう関わるかについて述べたい。

英語から日本語に翻訳をする際の問題点は意味範囲の違い、文法構造の違いに起因するズレとして扱われることが多い。しかし、それだけでは日本語訳に現れた不自然さを説明できないことがある。本稿で取り上げた例もその一つである。試訳として示したaの日本語文は文法的に間違っているとは言えない。日本語文aの不自然さは、日本語話者が状況の中で何が一番際立っていると捉えるかに起因するものであると考えられる。言語化しようとしている状況にたとえ話者が参加していても、英語ではそれを客観的に眺めて言語化する習慣があるのに対し、日本語では話者である「私」を最も際立った実体として捉えるのが習慣であることがわかった。これを明らかにするには、認知文法論の枠組みを使って説明するのが有効であることを本稿で示すことができたのではないかと思う。

では、原文の英語と翻訳の日本語にどのような違いが現れるのであろうか。一つ言えることは、英語と比べて、日本語の文は語り手である「私」が主語となるため、状況に臨場感が現れることである。英語では場面を外から客観的に眺めて表現するため臨場感が薄いと言える。英語で臨場感を出したい場合、主語をIにすることができる。しかし、逆に英語のように客観的に状況を外から眺めようとして「私」を最も際立った実体から外そうとすると、日本語では不自然な文になる。そこに日本語話者のものの捉え方による翻訳の一つの限界が示されているのかもしれない。

注

- 1) 従来の文法で、「主語」は「文において述語の示す動作・作用・属性などの主体を表す部分」、「動詞の前にくる文の一部」、「動詞と数の一致がある部分」などとされてきたが、その定義は特定の言語にしか当てはまらなかったり、「主語」の一側面しか捉えていなかったりした。しかし、認知言語学では、文は人間が物事をどう捉えているかを反映していると考え、ある状況を言語化しようとしている言語使用者が状況の中で最も際立った参加者だと捉えたものが「主語」であると定義している。この定義は言語に左右されることなく、「主語」になり得る実体を広く許容する。

参考文献

- Hinds, J. (1986) *Situation vs. person focus*. 東京：くろしお出版。
- 池上嘉彦（1981）『「する」と「なる」の言語学』東京：大修館書店。
- 池上嘉彦（2006）『英語の感覚・日本語の感覚』東京：日本放送協会出版。
- Iwasaki, S. (1993) *Subjectivity in grammar and discourse: Theoretical considerations and a case study of Japanese spoken discourse*. Philadelphia: John Benjamins.
- 木村哲也（1993）『英語らしさに迫る』東京：研究社出版。
- 国広哲弥（1974）「日英語の表現体系の比較」『言語生活』3月号。pp.46-52.
- Langacker, R.W. (1991) *Foundations of cognitive grammar, Vol.2: Descriptive application*. Stanford: Stanford University Press.
- Langacker, R.W. (2008) *Cognitive grammar: A basic introduction*. Oxford: Oxford University Press.
- Mead, M. (Ed.) (1959). *Anthropologist at work: Writings of Ruth Benedict*. New York: Houghton Mifflin Company.
- 大久保康雄（訳）（1969）「最後の一片」、『O.ヘンリー短編集』東京：新潮社。
- Porter, Sydney (O. Henryの本名) (1948) The last leaf. In *The pocket book of O. Henry stories*. New York: Washington Square Press.
- 對馬康弘（2011）「日英語の無生物主語構文の認知メカニズム——認知文法と認知モードによる解法——」『文化と言語：札幌大学外国語学部紀要』74号。pp.31-86.
- Uehara, S. (1998) Pronoun drop and perspective in Japanese. In Akatsuka, et al. (Eds.) *Japanese/Korean Linguistics* 7. pp.275-289.

